

時の動き

新しいオリンピックへ 「オリ・パラ中止集会とデモを行なって」

「オリ・パラ中止集会とデモ」実行委員会代表 川村 晃生

金にまみれたオリンピック

1984年のロサンゼルス大会あたりから顕在化し始めたオリンピックの商業主義や金権体質は、今度の東京大会で絶頂に達したと言ってよいだろう。主に放映権料をめぐるこの金権主義の成果は、競技活動支援のほかに、五輪関係者の過剰な贅沢と私腹肥やしにあてられる部分が大きいの。IOC会長バツハ氏らが宿泊するホテルの最高級の部屋や、五輪に群がる関係者の法外な手当、またただ下請けに仕事を流すだけの大手広告代理店への支払金などが主なものだが、今度の東京大会開催の

最大かつ唯一の功績といえ、その体質がようやく露わにされたことであるうか。

それにしても東京大会ほど、不祥事にあふれた大会はない。おそらく今後もないであろうが、「原発事故のアンダーコントロール」「世界一金のかからない五輪」「国立競技場の設計変更」「エンブレムの盗作」「森会長の女性差別発言」「野村萬斎氏らの開閉会式でのチーム解任」「クリエーティブディレクターの女性タレントの侮辱問題」「JOC経済部長の自殺と思われる電車事故死」などなど、挙げれば枚挙にいとまがないほど、嘘と忌まわし

い出来事で満ち満ちている。

そこに加えてのコロナ禍である。東京大会は、東京都に緊急事態宣言が発令された中で強行され、しかも大会進行中に東京都のコロナ感染者は急増した。菅首相は、五輪とコロナ感染者の急増は関係ないと強弁するが、五輪の強行が緊急事態宣言下の東京都民や国民に気の緩みを生じさせたことはまちがいない。五輪をやっているのだから、という理由で外出や会食をしても気が咎めることのない人も多いのではなからうか。不祥事の数々とコロナ禍の状況をふまえて、組織関係者が「今度の五輪は呪われている」と言ったそ



甲府駅前繁華街を「オリ・パラ中止・延期」の横断幕をもってデモする筆者と参加者

うだが、自ら招いた災禍を「呪われている」などと言うのは何事か。その感覚が理解できない。

オリ・パラ・中止集会とデモ

さて、こうした状況下で、6月22日、7月16日、7月30日の三回にわたって、甲府駅南口広場で「オリ・パラ中止集会とデモ」を開催した。16日は集会だけだったが、いずれも50

名前後の人が集まり盛況であった。スピーチも「オリンピック反対」の声が相次ぎ、デモも「オリンピックを中止しよう」のコールが続いた。こうした声を上げること、すぐさまオリンピックの中止ということにはならないにしても、たとえ開催中でも、東京大会の中止を望む声があることを公の形で広報することは重要なことだと思う。そしてそれは民主主義の原点でもある。

新しいオリンピックにむけて

いま、そしてこれから私たちがなすべきことは、こうした金権体質のオリンピックを見直し、オリンピックの原点を検証しつつ、オリンピックはどうあるべきかを議論することであろう。そして新しいオリンピック像を造りあげていくことではあるまいか。メダル争いの坩堝（るつぼ）から脱却し、平和や平等や共生が実現するオリンピック

クはどうあるべきかを考えよう。選手の成果だけを重視し騒ぎ立てるメダル争いは醜悪であり、メダル競争のために莫大な金が注ぎ込まれることにもなる。

それにしても今度の東京大会の開催に際して、参加選手たちが開催の是非について口を噤（つぶ）み続けたのは反省すべきことだと思う。大会の主役たちが、大会の開催につき何らかの意見や批判が表明できるようなシステムはやはり必要ではなからうか。一年の中で最も暑さと湿度に悩まされる時期に、「温暖で理想的な環境」と偽って連れてきた五輪である。途中棄権が相次いだ競歩や女子マラソンを横目で睨みながら、競技の場とは別に、選手たちの意見の表明の場を確保することは今後考えるべきだろう。そこに新しいオリンピックへの道の一つが見えてくるかもしれない。

（かわむら てるお）